

## 日本語の再発見

言葉は成功のための鍵である

多分もう二十年以上も昔の事になるかと思ふ。「リーダーズ・ダイジェスト」誌に、「偉大な言葉の力」といふタイトルで、アメリカの人間工学研究所が行った“言語力調査”の結果が報告されたことがあった。

それに拠ると、「中学生・高校生・大学生から工場勤務者・大会社幹部・社長クラスまで、およそ四十万人といふ龐大な人々に対して言語力の調査を行ったところ、地位の上下や収入の多少が、言語力と全く正比例して居り、また、学校の成績も同様であった」と述べられてゐた。

このテストで最高点を取ったのは、アメリカでも著名な大会社の社長であったと言ふ。得点は二七二点であったと報告されてゐた。そして、大会社の幹部の平均点は二四〇点、課長級の平均点は一四一点、係長級の平均点は八六点……とこのやうに、地位の上下、収入の多少が、言語力と全く正比例してゐたのである。

これは、学校においても同じであつて、医学・工学・法律・経済……その専攻科目の如何に関はず、この言語力テストで最高点を取った学生は、その学部の成績においても、やはり最高の成績を納めてゐる者がほとんどであつた、と言ふ。

この調査の結果に拠り、「言葉の力は、学校においても、社会におい

ても、成功するために最も必要な条件である」といふ結論を、人間工学研究所は下したのである。

これはアメリカの社会における調査の結論であるが、どこの国の社会においても、このやうな調査をすれば、やはり同じ結果が得られ、同じ結論に達するに違ひない、と私は思つてゐる。それは、「言語力の優劣が、吸収する情報や知識の多少を左右する」ものであるから、よくよく考へて見れば、それは極めて当然の道理だと思ふ。

同じ長さの時間だけ読書したとしても、その人の言葉の力が優れてゐるか否かによって読書量に大きな違ひが現れるのは勿論であるが、その理解の深さに大きな違ひがあるので、同じ時間の読書から得られるものの価値に大きな違ひがあるのである。